

左官職人 — 竹下勝美 [前編]

約百年前の創建当時の姿に復原された、
東京駅・丸の内駅舎。
赤レンガとともに駅舎の象徴となっている
外壁の白い装飾・擬石の復原を担当したのが、
左官職人・竹下勝美だ。
これまでの職人半生と、左官仕事の現状について話を聞いた。



丸の内駅舎の装飾「擬石」を施工する。擬石は花崗岩や大理石などの天然の石に似せて作られた建材で、「人造石」とも呼ばれる。近年は用いられる機会が少ない。



よみがえった東京駅のドーム屋根

「東京の玄関口」の外壁を手がける

大正時代の創建時の外観が忠実に復原され、今年十月一日にグランドオープンした東京駅・丸の内駅舎。有名なドーム屋根や、赤レンガと白亜の装飾で彩られた外壁が、道行く人々の視線を集めている。

この外壁の装飾には、「花崗岩」と「擬石」という二種類の建材が使われている。天然の岩石である花崗岩に対して、擬石はモルタルのようになやわらかく練った材料を左官職人が鋺で成形していく。外見上はよく似ているが、当然ながら技術も製法も全く異なるものだ。

ここ東京駅・丸の内駅舎の現場で擬石施工の中心的役割を果たした左官職人・竹下勝美は、一九四四（昭和十九）年、島根県瀬戸郡（現在の大田市）に生まれた。実家は農家だが、当時は家業を継げるのは長男だけで、次男・三男は奉公に出されるのが当たり前だった時代。

「農家の次男坊だったから、少しでも手に職をつけよう」と、姉の嫁ぎ先に弟子入りしたんです」

新制中学を卒業後すぐに上京し、姉のつてを頼って左官工に弟子入りした。

「最初の四年間は修業期間で、私の場合は材料の練り方から塗る作業までとにかく毎日繰り返してました。セメントを扱っていると手が荒れてくるんですけど、当時は手袋も使わせてもらえなくて、血が出たり皸だこができてたりして：我ながらよくがまんしてやってたもんです」

「一人前になつてからも、みんながうまくやれることをどうして自分だけできないのか悩んだり…。この道でやっていくには、何ごとも辛抱するのと、あとは本人のやる気ですよ」

自らあまり多くを語ろうとはしない控えめな口調の端々に、職人としての矜持がにじんだ。



たけした・かつみ ●1944 (昭和19)年、島根県生まれ。農家に育ち、新制中学卒業後に上京して左官工に弟子入り。四年の修業を経て左官職人となる。1982 (昭和57)年には全国左官技能競技大会での優勝歴も。1968 (昭和43)年からは現在も所属する池本工業に勤務。

「左官職人の仕事は、表面に残る。だからこそ手を抜けない」

謙虚な職人が「一番に誇れる」仕事

そんな竹下が「一番の思い出」として挙げる仕事は、「伊豆の長八美術館」。建設に際しては、この伝説的な職人の殿堂を完成させるため、日本全国から左官の達人が集結した。竹下もその匠の一人として、美術館正面の腰壁や犬走りなどの洗い出しを担当したのだった。



左官工の道具

日本の経済成長を支えた左官工

民家の土壁や城郭・土蔵の漆喰など、左官工は古くから日本の建築の壁仕上げには欠かせない職能だった。明治期になると西洋建築が増えたが、そこでもレンガなどの壁をモルタルで仕上げるという工程があり、さらにニーズが広がった。

竹下がかかわってきた現場は「野丁場」。今はあまり使われない言葉だが、一般住宅にあたる「町場」に対して、ビルやマンションなどの大型建築物の現場を指す。

今でこそビルの内壁は石膏ボードやクロスを使って短時間で仕上げる方法が普及しているが、かつては内・外壁の多くの部分が塗り壁仕上げであり、高度経済成長期、都市部で鉄筋コンクリートのビルが大量に建てられた時代、左官職人は「野丁場」で引く手あまただった。

最近の仕事の傾向を尋ねると、「表に出る仕事が減った」という。

「塗る作業そのものには変わりはないんです。変わってきたのは材料や仕事の内容。自分の仕事が残る現場が少なくなりましたね」

左官がつくった下地の上に化粧レンガやタイルが貼られる。全国左官技能競技大会で日本一を獲得したこともある名人としては忸怩たる思

いだろう。

「そこへいくと、今度の東京駅の仕事は表に出るどころか、みんなの目に触れるところはずっと先まで残る仕事ですから。装飾は複雑だし、規模もでかいし、工期も限られてるしで、最初はエライことになったと思いますけど」

東京駅で使われている擬石には、「洗い出し」という仕上げが施されている。鏝で入念に形を整えながら表面の石の粒の向きをそろえ、最後にモルタルを水で洗い流すと、白く滑らかな表層だけが残り、独特の風合いを醸す。だが…

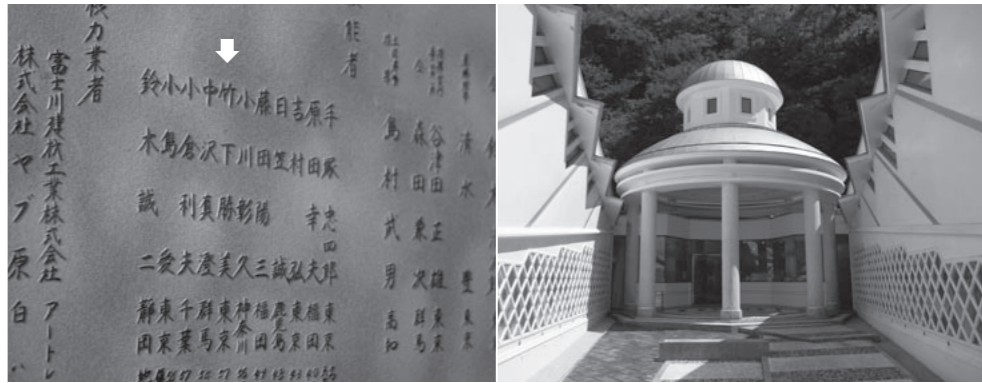
「この東京駅の現場で一番気を使ったのは、水を下に落とせない、っていうこと。下に赤レンガや花崗岩、そこそ擬石も、仕上がったものがありますから。『洗い出し』っていうのは、最後に水で洗い流すからそう呼ぶんですけど、それがこじやできないんで」

本来、専用の道具を使ってホースで水をかけるように表面のモルタルを洗い落とすところを、下部の装飾への影響を考慮して、刷毛一本でいいねいに取り除かなければならなかった。工程の都合上やむを得ないとはいえ、イレギュラーな方法で、技と根気が求められる作業を黙々とこなし

「文句をいうヒマがあつたら手を動かす」。竹下の職人気質が発揮された施工だった。

「あれこそ、左官職人冥利ですよ。あんな風に分の塗ったものが真っ正面から見える仕事はなかなかない」

「自分より上手な人はいくらでもいる」という慎ましい人柄。口数少なく、職人特有の押し強さもない竹下だが、その彼をしても「表に出る」仕事にはこだわりを持つ。そこに左官職人としてのゆずれない気概を感じた。



右/伊豆の長八美術館。江戸から明治にかけて「鏝絵」と呼ばれる漆喰細工で数々の傑作を残した名工・入江長八の業績を後世に伝えるため、彼の故郷に立てられた。
左/1984年の美術館建設当時、全国から集まった左官工の名が記されている銘板。その中には竹下の名も。